



NERPS インターンシップ体験記 鍵谷開

私は広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程前期2年に進学した2021年の4月から2022年の3月まで、1年間NERPSにてインターンシップを経験しました。

基本的な業務としては、SNSやホームページによる学内情報の発信を担当しておりましたが、時期によってはSDGsレポートの校正や国際学会のサポートなどを行いました。

NERPSのSNSアカウントとして4月から開設したtwitterでは、SDGsの各ゴールに沿ったトピックとその概要を紹介するなど、#HU×SDGsを合言葉にさまざまな企画を行いました。しかし、それらの経験の中でも、私にとって最も身になったことは単なる事務能力や広報経験以上に、業務を通じてSDGsを考察し、意識できたことで、自身の興味関心を持続可能性との関係性から改めて考える視点を得ることができたことでした。

【修士論文のテーマについて】

私は修士論文でスケートボードをテーマとして扱い、広島県内を中心に約1年4ヶ月間のフィールドワークを行いました。スケーター（スケートボード実践者）たちのコミュニティへと入り込み、活動をともしながら観察を行う「参与観察」をもとに、スケートボードを取り巻く人々とモノや環境といった非人間との相互関係を研究することが目的です。このような視点からスケートボードを観察してみると、スケーターたちがスケートボードを通して流れるように移動を繰り返し、特定の場所に関係なくスケートボードという実践がその都度、流動的に展開される様相を明らかにすることができました。その結果、スケートボード実践に少なからず実践の場を超えて展開される流動性が認められる限り、それら多様な実践の場はスケート実践を支えるインフラとして、連続的なものであるという結論に至りました。

現在、日本国内では東京2020オリンピックの新競技としてスケートボードが採用された影響を受けながら、アーバンスポーツ（都市型スポーツ）の推進による地域・経済活性化を目指す「アーバンスポーツツーリズム」が振興されています。その一環として、行政によるスケートパーク（スケートボード専用の施設）の増設はスポーツとしてのスケートボード推進のみならず、道端などのストリートで行われる迷惑行為としての「ストリートスケート」を抑止する上でも有効とされています。しかし、このようにストリートスケートが迷惑行為とされることで、それらが発生する原因はスケートパーク不足へと収斂されてしまい、結果としてストリートスケートの当事者であるスケーターたちは不可視化されていきます。つまり、都市開発の文脈から増設されたスケートパークは、スケーターたちのインフラとなる一方で、そのほか一部のスケート実践を排除してしまう可能性をもつ両義的な存在といえるのです。

このようなスケートボード実践を取り巻く複雑な排除と包摂の関係性を読み解いてみると、スケートボードを万人にスポーツとして認知させることのみが、その推進策といえるのかについては疑問が残ります。だからといって、なにもスケートパークの増設を廃止し、ストリートスケートのみを推進すべきだと主張したいわけではありません。ここで言いたいことは、これからのスケートボード、またスケートパークの持続可能性を考えた結果として、ストリートスケートを迷惑行為として片付けてしまうべきではないということです。

このような現状を一つの問題意識とし、修士論文ではその議論の焦点を「ストリートスケートの排除」ではなく、言うなれば「スケートパークが利用されない事実」へと合わせました。そこでスケートボードを単なる身体実践としてではなく、モノや環境との相互関係の上に形成される流動的な実践として捉え直し、スケーターたちにとってのインフラやスケートボードそのものを再考することで、この問題への回答を試みたのです。



この視点を抜きにしていくらスケートパークを増設したところで、スケーターたちがストリートへと繰り出す事実は変わらず、ストリートスケートがスケーターにとっても非スケーターにとっても事故などの可能性を孕む危険なものであることもまた変わりません。これでは本当の意味でのスケートボード推進は叶わないでしょう。だからこそ、私はある公園でスケーターと非スケーターが不安定ながらも互いの実践を調整し合い、空間の共有を維持している事例に注目しました。

そこでは、自身にとっての公園を守りたいという多様な利用者の思いと、他者の日常が重なり合うことで、自発的な公園維持活動が繰り広げられていました。その結果として、持続的に両者の実践は維持され、公園という公共空間は守られていたのです。例えば、非スケーターの人々はスケーターたちの存在を意識して駐輪の位置を調整したり、一方のスケーターたちは他の公園利用者がいるからこそ、その動きを柔軟に変化させ、事故が起きないように配慮を払うなど、公園内で両者の実践はアレンジされていました。ある非スケーターの方は、このようなスケーターたちの実践を「空気が読める」と表現しています。

このような事例にこそ、スケートボードの持続可能性を考える端緒があると私は考えます。スケートパークを増設する背後でも、非スケーターからの否定的な意見やクレームが原因で完成後もパークの運用ができなかったケースがあります。スケートボードに対する偏見が存在していることは事実であり、この垣根を越えない限り、真にスケーターのためにも、非スケーターのためにもなるような施策は誕生し得ません。スケートボード実践の流動性に注目したことは、裏を返せばスケーターたちが社会や環境に合わせて柔軟に実践を変化させていることに目を向けることでもありました。

例えばこの公園のように、スケーターたちの柔軟性が広く活かされ、スケーターと非スケーターの日常が両者の相互作用を通して調整できたとすれば、スケートボードはこれまで以上に自由な実践として多くの人々に受け入れられるはずです。そのため、スケートパークによってスケーターと非スケーターとの間に線引きをしてしまうのではなく、多様な解釈の余地を残した空間においてこそ、両者の持続的な関係性は構築されるのではないかと修士論文では考察を行いました。この研究の主旨は、フィールドワークを通じて得られた経験からスケーターたちの世界をエスノグラフィー（民族誌）として内側から描くことでした。しかし、今後はその議論をスケートボードから社会へと広げ、持続可能な環境の維持や公共空間のあり方にまで議論の裾野を広げることも可能であると思います。

【修士論文の執筆とNERPSでの経験を踏まえて】

修士論文で執筆したテーマは、自身の興味関心に基づいた内容でしたが、この研究が広く社会といかに結びついてくるのかについては、次の課題であるといえるでしょう。

ここで一つ言えることとは、大小に関係なくすべての社会問題は繋がっているということです。スケーターの移動は、彼らの身体のみによって完結し、左右されるものではなく、社会の動きや、実践の場によって流動的に変化するものでありました。これだけを見ても、スケートボードを取り巻く問題がいかに異なる社会問題と関係しているかは想像に難くありません。その意味で、持続可能性とはあらゆるトピックに関連しているといえるでしょう。

現在、SDGsという言葉が国内で広く浸透し、多くの人々に認識されていることは喜ばしいことです。しかし、その過程で言葉のみが一人歩きしてしまい、例えば自社の活動をゴールごとに分類していくことばかりが、強く意識されているようにも感じます。SDGsを通して我々が意識すべきこととは、時代の流れの中で一時の解決策としてではなく、かといって現状維持のみに注力するわけでもなく、自身の持続可能な発展を現在地からいかにして考えるか、にあるのではないのでしょうか。その結果として、SDGsのゴールに自身の活動が分類できることがあったとしても、それを目的に行動を起こすことは本末転倒といえるでしょう。

それぞれの抱える問題意識や課題に対する解決策は、スケートパークの増設のみがスケートボード推進とは直



結しないように、多種多様なものであります。だからこそ、その問題意識や課題に対するアプローチとして Sustainable Development のレンズを通して事象を観察してみれば、その先には地球規模での社会問題が見えてくるはずです。SDGs とは、本来既存の枠を超えて、個別的な活動をグローバルにつなぐ役割を持つものであったと思います。

NERPS での業務を通じて感じ、思い至ったこの考えを胸に、今後は自分なりの問題意識に基づいた活動を通じて社会貢献を果たし、分野や属性を超えた協働の形を追求していきたいと強く思っています。そのきっかけとアイデアを与えてくれた NERPS、そしてすべての人々と非人間たちに心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

2022年3月30日 鍵谷開